

米国における幼稚園用の歌の本の発展の意義

—20世紀初頭の Vandewalker と Hill の見解の比較を通じて—

武内 裕明
(弘前大学)

American Kindergarten Song Books' Development from the View Point of Vandewalker and Hill in the Early 20th Century

Hiroaki TAKEUCHI

はじめに

米国の音楽教育史における幼稚園の影響に関する見解は、非常に分裂した状態にある。一方は、学校音楽の発展史を叙述する際に幼稚園はほとんど等閑視する見解である。武内(2009)が指摘しているように、Birge, Keene, Tellstrom, Mark と Gray などの音楽教育史の著者は、幼稚園についてはフレーベルの思想について中心的に扱うか、あるいは20世紀初期に幼稚園について叙述した Vandewalker (1908) に依拠した記述を行って幼稚園においても音楽教育が発展してきたことを指摘するに留まっている。このような記述の少なさは、音楽教育史で扱う一般的な資料群に幼稚園の内容が少ないことも関係していると考えられるが、結果として学校教育の一部であるにもかかわらず幼稚園の音楽教育に関する歴史的研究は進んでいない。他方は、先述の Vandewalker をはじめとした幼稚園教育者の側の、幼稚園の教育方法はアメリカの学校教育の改革に大きな影響を与え、幼稚園の音楽が小学校に影響を与え、受容されていくことになるという見解である。ここでは幼稚園の音楽教育こそが19世紀後期から20世紀初頭の音楽教育の発展に寄与したと考えられている。

本論では、このように分裂したアメリカの音楽教育史に関する認識を整理し、米国の音楽教育における幼稚園の影響を位置づけていく一環として、20世紀初頭の幼稚園教育の関係者たちの当事者としての語りを中心に焦点を当てる。この時期には、幼稚園教育がアメリカにある程度定着し、フレーベル主義から進歩主義へと幼稚園が拠って立つ理念の変遷もあり、幼稚園に関する歴史が語られる必要性が生じたであろう時期である。当然ながら、20世紀初頭は1850年代以降幼稚園教育の礎を築いた教育者たちの最晩年にあたる時期でもある。幼稚園の教育について第一世代の幼稚園教師たちの活動を同時代人が記録しようとするなら、20世紀初頭はまさに好機といえたであろう。

これまで Vandewalker (1908) の叙述は、当時の幼児音楽教育の歴史をまとめたものとして、研究書のように扱われてきた。しかし、本論ではこれを相対化して、一人の幼稚園教育に関する師範学校の教師の意見として読み解く。そのために重要になるのが、進歩主義の幼稚園教師として高名な Hill, P. S. による、*Kindergarten Review* に掲載された論文“The History of the Kindergarten Song in America” (1910) である。アメリカの音楽教育史の展開に幼稚園を関連させて述べる際に、この論文を主要な資料としたものはほとんど存在していないようである。そこで、ほぼ同時期に Vandewalker と Hill の2人の著者がまとめた幼稚園用の歌の本に関する記述を比較することによって、当時の幼稚園教育の当事者たちが、幼稚園用の歌の本の充実をどのように位置づけていたのかを明らかにすることを本論文の目的とする。

1. 先行研究の検討

Hill の当該論文の一部は、早くも掲載の1年後に日本で紹介されていたことは特筆に値する。これは倉橋惣三が雑誌『婦人と子ども』において紹介したものであり、Hill の論文のまとめに当たる現在の幼稚園

の歌の使用に関する批判を抄訳している。倉橋は、日本の幼稚園教育の参考にするために Hill の見解を紹介したのである。倉橋の翻訳は、Hill の主張をかなり自由に日本語に直してわかりやすく伝えるものであったが、その紹介内容は不十分である。第一に、倉橋自身が米国の幼稚園教育の発展史に主要な関心がなかったために、「ヒル氏は米國に於ける幼稚園唱歌の發達の歴史を叙した末に、幼稚園における音楽問題に関し、次のごとき概論を試みて居る」¹⁾との一言で、およそ 10 ページにわたる Hill の叙述を紹介しないままにしていることである。また、翻訳内容も 11 の指摘のうち、(1) に関しては並列ではないところを並列のように記述する誤解があり、(4) では音程、拍子と紹介しているところは、実際には音域と音程であるなどの誤解がある。さらに、鑑賞や識別、といった幼稚園でも主要な概念になりつつあった重要概念が、翻訳上消えていることも理解を進める妨げとなる。

このように Hill の論文を同時代に扱ったものを除いては、関連領域の先行研究は限られている。白川 (1997) の研究は、フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の受容の過程を検討するなかで、最初期の幼稚園用の歌の本を検討し、Hill の指摘などとは独自にフレーベルの歌が初期のアメリカの幼稚園で歌われていたことを指摘し、後のプロウの『母の遊戯と育児歌』の翻訳では、民謡の旋律やアメリカでの新作が加えられ、アメリカで独自の受容をされたことを指摘している²⁾。さらに、プロウが確立したフレーベル主義幼稚園についても、日本で通俗的に理解されているようにフレーベルの指導を厳格に守ったという解釈はありえず、歌とゲームが重要視され、遊び方や歌い方の指導はされていたが、フレーベルの精神は伝えられていなかったのではないかと、として、アメリカの幼稚園が発展していく過程についての日本での理解を厳しく批判している³⁾。これらはいずれも後に見る Hill の指摘にも存在する内容であり、的確な指摘となっている。このほかの先行研究として、武内 (2009, 2010) の一連の研究がある。これらは Vandewalker の指摘した初期の幼稚園用の歌の本を検討したものであり、武内 (2009) では、幼稚園の歌の発達が音楽教育側の論者の見解を受けて発展し、音楽鑑賞教育につながる関心がもたらされたこと、および、フレーベルの教育思想の具現化、実用的な歌と遊びの教材集の提供、音楽教育への関心という別々の関心が最初期のテキストには見られ、目的の面でまとまりのあるものではなかったことが指摘されている。武内 (2010) では、ファンタジーやナンセンスといった過去の子どもに親しまれた歌でもなく、学校音楽が開発した読譜練習用の教育方法としての歌でもなく、子どもの興味を利用し、歌うことで教育効果が得られるような歌だけを子どもに与えようとする教育的意図のある作品群として Vandewalker が幼稚園用の歌の本として選ぶ作品を限定したのではないかと、という指摘を行っている。これは Vandewalker の指摘した歌の本の記述内容から Vandewalker の見解を再構成しようとするものであったが、雑多な寄せ集めの作品群を現代の視点から再解釈している点にはさらに検討の余地が残されている。

先行研究で、Vandewalker の意図が明確にしきれていないことと、Vandewalker の概観がアメリカの幼児音楽教育の歴史を語る際に必ずといっていいほど用いられていることには、関連がある。すなわち、幼稚園用の歌の本が小学校の音楽を豊かにした、とでもいうべき主張の他には、比較的主観を省き、教材の増加のみを叙述した Vandewalker の記述は、中立性が高いがゆえに解釈の糸口がないのである。

2. Vandewalker による幼稚園用の歌の本の意義

以下は Vandewalker が描写する 19 世紀の幼稚園用の歌の本の導入の過程である。

(1) 背景

1) 学校の問題

Vandewalker にとって、幼稚園の教育が重要な役割を果たすのは、それが読み書き算の授業だけを行っていた小学校教育を改革する原動力になったためであった。小学校教師が「当時の学校の活動の特徴づけていた形式主義に浸っていた」⁴⁾時代に、幼稚園の教師たちの子どもへの態度は非常に示唆に富むものであったとされる。「子どもたちの興味と要求に対する共感的洞察」⁵⁾や「自分たちの活動に取り組む子どもたちの態度や、興味の自発性、明るい色の教材をつかう際の喜び」⁶⁾、さらに幼稚園のゲームは小学校教師たちに影響を与えたという。これは「混乱のない自由が可能である」⁷⁾ことを、ゲームで秩序正しく遊ぶ子ども達が示していたためである。しかし、小学校への幼稚園の影響は、理念的なものではなく、実践的な教育方法の小学校への導入のみに留まっていたと Vandewalker は考えている。これは、フレーベル

の思想と実際の幼稚園の間に相矛盾する点があったためであるとされる⁸⁾。そのような意味で、理論書以上に実践に関する書籍は大きな影響を与えたと考えられている。

Vandewalker が指摘した幼稚園の影響を受ける以前の小学校は、音楽教育に関しては、読譜課題を中心としたルーミスの教本が使われる読譜重視の傾向がとりわけ強い時期であった。そのような時代において、幼稚園で子どもたちが幼稚園の歌に興味を示す様子を見た小学校教師たちは、これまで自分たちの行ってきた「音階や音程のドリルを苦役よりほんの少しましな程度のもの」⁹⁾と考えるようになったと Vandewalker は理解したのである。

2) 芸術への関心

一方で、アメリカ社会が芸術に目を向け始めたことを受けて、教育改革の機運が生じて「教育への美的要素の導入が奨励され」¹⁰⁾ることとなる。そのような芸術への関心を満たすものとして、幼稚園の教育方法が注目されるようになったとされる。物語や遊戯などと並んでとりわけ注目されたのが音楽であり、幼稚園の教育方法を普及させるために、幼稚園用の歌の本が重要な役割を果たすと考えられているのである。幼稚園用の歌の本は小学校のものにはない良質の歌を含んでいる、ということに小学校教師が関心を寄せたとされているが¹¹⁾、そこで言及されている幼稚園用の歌の本 (the kindergarten song book) とはフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』のことではない。Vandewalker は、子どもの音楽性の発達のために新曲が必要とされると考えており、フレーベルの「恩物遊びに関する歌の価値を否定はしないが、真の音楽的感情やリアルな音楽表現の条件が、そのほとんどで欠けていることは認めなければならない」¹²⁾と否定的であった。そのため「真に音楽的で、思想、歌詞、旋律の子どもらしい (childlike) 歌の作曲」¹³⁾が必要とされるのであり、その結果、1880年代以降の幼稚園用の歌の本の発展が生じるというのが、Vandewalker の概観である。

(2) 教材の発展

音楽教材の発展の最初に来るのが、幼稚園用の歌の本の刊行である。このような教材の最初に1881年の Hubbard の *Merry Songs and Games*, 次いで1885年の Wiggins の *Kindergarten Chimes*, 1887年の Smith の *Songs for Little Children* と Hailman の *Songs, Games, and Rhymes* が出版される。しかし、これらが需要を満たしたのは数年に過ぎず、その後次々と教材が登場する。1890年の Emerson と Brown の *Stories in Song*, 1892年の Jenks と Walker の *Songs and Games for Little Ones*, 1893年の Hill 姉妹による *Song Stories for the Kindergarten*, 1896年に出た Jenks と Rust の *Song Echoes*, Neidlinger の *Small Songs for Small Singers*, Gaynor の *Songs for the Child World*, Poulsson の *Holiday Songs* などの歌の本がそれらに当たる。これらの一連の歌の本の充実の後には、器楽曲と伝承遊戯の教材も出版され、幼稚園の音楽教材の幅を広げていく。1896年の Anderson の *Instrumental Characteristic Rhythms* や、Hofer の *Music for Child World* がマーチその他の幼稚園で必要とされる音楽を提供し、同じく Hofer の *Singing Games* (1896) と *Popular Folk Games* (1907) が伝統的な遊び歌を利用可能にした¹⁴⁾。

このような Vandewalker の見立ては、幼稚園で使われる音楽教材の単純な量的拡大局面の叙述として読むことができる。そのために、この記述は長らく幼稚園の教材の拡大の時代に生きた Vandewalker の証言としよりも、中立的な先行研究として扱われたのである。この記述自体が幼稚園で用いられた教材を選別しており、Vandewalker が意図的に選んだ一部の教材の説明であることは、武内 (2010) の指摘のとおりである。ともあれ、教材に関する記述自体は淡々としたものであり、真に音楽的で子どもらしい歌の作曲が求められた、と記述した Vandewalker の主張の意図を明らかにするには、その他の同時代の主張を通じた補完が必要となる。

3. Hill による幼稚園用の歌の本の意義

Vandewalker の記述を補完しうるのが、同じく幼稚園用の歌に関する歴史的概観を同時代に行った Hill の論文である。Hill による幼稚園教育用の歌の本の概観は以下の内容である。

(1) 深刻な幼稚園用の歌不足

Hill の論文の冒頭では、「幼稚園の歌の歴史の調査において最も印象深いのは、現代の歌の富を十全に受け継いで生まれた今日の幼稚園教師が、アメリカで初期に開設された幼稚園のために歌とゲームを確保するという初期のアメリカの幼稚園教師たちの闘争の概念を有していないことである」¹⁵⁾ という Hill の感慨、すなわち、20 世紀初期の音楽に関する教材が充実した時代の幼稚園教師と、歌やゲームのレパートリーに事欠いていたアメリカの初期の幼稚園教師との隔絶の印象が語られている。初期の幼稚園では利用できる歌やゲームが不足しており、その状況が、一方では『母の歌と愛撫の歌』の翻訳への渴望を、もう一方は寄せ集めの手書き原稿としてでも歌を集める作業を初期の幼稚園教師に強いていたとされる。しかし、初期のこのような試みは、20 世紀初期の状況から顧みると不十分であり、最初期の取り組みは「子どもらしくなく、音楽的でなく、詩的でもない歌への取り組み」¹⁶⁾ も多かったようである。Hill の記述によれば、このような望ましくない結果になる理由を Blow はドイツ語の韻を踏まない翻訳に、他の幼稚園教師は、初期の流行歌や聖歌、喜歌劇までを寄せ集めにした手製の本のためであると考えていた¹⁷⁾。このような状況を打破するために幼稚園用の歌の本は大いに貢献したのであり、その成果もあって Hill 自身は現在幼稚園では過剰に歌が用いられていると考えていた。その一方で、「過去の最良の曲も、明日の正しさ、美しさ、真実を見せることはない」¹⁸⁾ として、Hill は現代の感覚に合うものを提供するために新曲が作られ続けることを奨励している。

(2) 教材の発展

1) 『母の歌と愛撫の歌』の翻訳から、新しい幼稚園用の歌へ

Hill は年代順の説明を不適當であるとはしながらも、幼稚園用の歌の本の発展を年代順に記述しながら、音楽的卓越への到達と、子どもの鑑賞と制御できるレベルに合わせる、という二つの理念の軸から説明している。Hill は、後者の子どものレベルに合わせるという方向性では子どもの能力を最大まで引き出すことに成功したとは限らないとしながらも、どちらの要求をも実現できるものへと幼稚園用の歌の本の内容が変わってきているとみなしている。

Vandewalker だけの記載した器楽教材や伝承遊びの教材もあるとはいえ、Hill が記述する教材は、歌の本に関する一覧としてはより充実した内容となっている。また、武内 (2010) が指摘した幼稚園を対象にした歌の本は Vandewalker 同様に一覧に含めておらず、Hill も教材のある観点から選別していたようである。Hill の記載した歌の本は、時系列で並べるなら、Noa の *Plays for the Kindergarten as Introduced in the Gymnastic Exercises of Mary Institute* (1873)、次いで著者不明の *Plays and Songs for the Kindergarten and Family* (1874)、その後は、Jarvis 版の翻訳の *Mother Play* (1878)、Pollock の *National Kindergarten Songs and Plays* (1880)、Hubbard の *Merry Songs and Games for the Use of the Kindergarten* (1881)、Wiggin の *Kindergarten Chimes* (1885)、Lord 版の *Mother Play*、Hailmann の *Songs, Games, and Rhymes for the Nursery, Kindergarten, and Primary School* (1887) と Smith の *Songs for Little Children* (1887)、Jenks と Walker の *Songs and Games for Little Ones* (1887)、Emerson と Brown の *Stories in Song* (1890)、Hill 姉妹の *Songs Stories for the Kindergarten* (1893)、Smith の *Songs for Little Children* の第 2 巻 (1894)、Blow 版の *Mother Play* (1895)、Neidlinger の *Small Songs for Small Singers* (1896)、Jenks と Rust の *Song Echoes from Child Land* (1896)、Hofer の *Singing Games* (1896)、Gaynor と Riley の *Songs for the Child World* (1897)、Knowlton の *Nature Songs for Children* (1898)、Reed の *Timely Games and Songs* (1900)、Poulsson の *Holiday Songs* (1901)、1907 年のルーシー・ウィーロック師範学校の卒業生による *Ring Songs and Games* (1907)、Brown の *One and Twenty Songs* (1907)、Claxton と Valentine の *A Dozen and Two* (年代不詳) であった。19 世紀の書籍の一覧については Vandewalker 以上に資料性が高く¹⁹⁾、1881 年以前の最初期の歌の本の解説があることや、『母の歌と愛撫の歌』の翻訳も幼稚園用の歌の本の歴史に含めていることに特徴がある。

これらの教材のうち *Stories in Song* までの教材に Hill は詳細に批評を加えている。Hill の説明は、『母の歌と愛撫の歌』の翻訳から新しい幼稚園用の歌へと幼稚園用の歌の本の重点が変わり、かつ幼稚園用の歌の本ではしばしば卓越した音楽性を中心に曲が選ばれていた、と要約できる。Hill は、初期の作品にフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の翻訳が多く存在しているが、それがフレーベルの歌であること

は説明されていなかったこと²⁰⁾、『母の歌と愛撫の歌』の翻訳の登場を通じて、フレーベルの歌の背後にあるフレーベルの思想を学ぶことができるようになったこと²¹⁾、Pollockが*National Kindergarten Songs and Plays*で編纂だけでなく作曲という表現を使ったことが幼稚園のアメリカ化の嚆矢であり²²⁾、その後独自の幼稚園用の歌が作られるようになること、Hubbardの*Merry Songs and Games for the Use of the Kindergarten*はBlowの有用な序文や良質の作品を含む影響力の大きな歌の本であったこと²³⁾、などを記載しながら、幼稚園用の歌の本が幼稚園だけでなく、家庭・学校へも射程を広げつつ増加し、新しい曲が作られるようになってきたことを、作品批評も加えながら叙述している。

このように大まかな流れがありながらも、子どものニーズと能力に合わせようとする考えと音楽としての質を吟味しようとする二つの理由から歌の本への評価は多面的で、一方を肯定しながら問題を指摘する、という複雑なものとなっている。

2) 子どものニーズと能力への適合

子どものニーズという観点について注意しておかなければならないのは、何をもってニーズとするかにHillの見解である。Hillの見解によると、初期の幼稚園の歌の道徳性に関する配慮は不明確で、不足しているととらえられるようであった。例えば、*Plays for the Kindergarten as Introduced in the Gymnastic Exercises of Mary Institute*収録の〈The Spindle〉のウォルター・スコットの詩を改変した歌詞を、Hillは問題にしている。Hillは、運命に対する、不可解で物悲しい態度は修正しようとしていないにも関わらず、幼児の遊びにふさわしくないということなのか「嫉妬」という言葉が省かれている、ということも挙げて、前者に関する修正が足りていないと感じているようである²⁴⁾。また、*Plays and Songs for the Kindergarten and Family*のハチをコマドリが、コマドリをタカが、タカを獵師が捕まえていく、という内容の歌詞をもつ〈Bee and Robin〉についても問題視している。Hillはこの歌詞について、20世紀初期の幼稚園教師が否定的な考えを除外しようという考えをもっていることに気づかされ、驚かされる歌であり、適者生存の原則を詩として体现したものだとの驚きを表明して批判している²⁵⁾。さらに、*National Kindergarten Songs and Plays*収録の〈The Yellow Birds〉についても、男女の子どもが卵を見つけ、小鳥を見つけ喜ぶ、という単純な物語を、ユーモアと受け取ればいいのか、真剣なものを受け取ればいいのか判別がつかない、と困惑気味である²⁶⁾。

これらの例に表れているように、明確な道徳性と、楽しく、肯定的な感情で満たされた歌を求める傾向こそ、「子どもらしさ (childlike)」と表されるものの一部であろう。その他にも、結論部分では、「歌は子どもの経験や気分の詩的解釈であり、正常で芸術的であるために音楽は短くなければならない」²⁷⁾、20世紀初頭時点の音楽に「詩的な、あるいは音楽的な思想や感情の繰り返しが少ない」²⁸⁾、子どもたちが鑑賞できるようになる前に「不必要に繊細で複雑な和声が提供されている」²⁹⁾などの課題の指摘、さらには「よい音質や純粋な旋律や歌の価値以上に、動き、リズム、ジェスチャー、ゲームのほう」³⁰⁾が強調されるべきである、「音を作り出したり、プレスをしたり、フレーズを考えたり、といった正しい習慣の形成よりも、表現の自発性に価値をおく」³¹⁾などの、子どものニーズについての言明も存在している。しかし、どのようなものが「子どもっぽさ (childish)」と表記されるのかには明確な説明はないままであり、クラシックの作品やドイツやスウェーデンの民謡が用いられていることで、「安っぽさや子どもっぽさがない」³²⁾というような否定形の記載があるのみであった。

3) 音楽としての質

音楽としての質の評価にも、上記の子どもらしさは関係してくる。

Hillは一方では、芸術性を尊重しているかのようである。初期の歌の本にシューベルトの〈Die Leiermann〉を思い浮かべさせる〈Organ Grinder〉という歌があることをはじめ³³⁾、クラシックの作品や民謡を用いていることを評価していることはもちろん、クラシックの音楽と類似する音楽の世界を伴奏の和声のもつ雰囲気を感じられるSmithの歌なども高く評価している³⁴⁾。

一方で、子どもに適さないと考える音楽や詩については批判がされている。*Merry Songs and Games*に関してであれば、後の幼稚園用の歌よりも水準が高いために「みんなで歌えなかったり、聴くだけになったり、部分的に参加するだけだった」³⁵⁾する曲があることが問題視される。水準が高いことはそれのみ

では評価の対象にならないのである。Smith の *Songs for Little Children* についても、「子どもたち自身の水準より高い音楽の鑑賞を教育する点では、これらの歌は素晴らしい」³⁶⁾ と評価している一方で、「子どもたちが決してこれらの歌を所有せず、どこでも歌われるものとしてこれらの歌を完全に習得することは決してない」³⁷⁾ という点を問題視し、これらの歌が卓越した成人と共に、子どものために歌われるときのみ素晴らしい、という見解を示している。

ごく初期の歌の本を除き、少なくとも多くの場合には、幼稚園用の歌の本については芸術性のほうに高い評価がされており、子どもらしい曲という理想よりも、音楽性が先行して発展していると Hill はとらえられていたようである。

4. 幼稚園用の歌の本の位置づけ

これまでの Vandewalker と Hill の主張を総合すると、幼稚園用の歌の本が果たした同時代的な意義として、1) 幼稚園用の歌の本の需要の増大、2) フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の受容から、アメリカ独自の幼稚園用の歌の創造への重点の変化、3) 子どもらしさの追及、4) 音楽性への配慮、の4点を指摘することができる。

1) についてはそれまでの先行研究の指摘のとおりであり、幼稚園用の歌の需要はあり、それに対応して多数の教材集が出版されることになったことに間違いはないであろう。しかし、2) のように、教材と考えられたものは当初は『母の歌と愛撫の歌』の翻訳であったが、しだいにアメリカで作られた、子どものニーズに合った新しい歌が求められるようになる。この点は、Hill の主張によって補完できるほか、独自に教材を研究した白川 (1997) にも指摘していた。3) については、大人用の子どもに合っていないものとしての子どもらしくない歌と安っぽく思える子どもっぽい歌の危うい境界線の間に、子どもらしさを探ろうとしていたことを読み取ることができる。このような子どもらしさは、歌詞の道徳性や陽気さ、といった詩の内容面だけでなく、短く、繰り返しの多い、詩や音楽といった形式面にまで及んでいる。また、音楽の分野で適切だと認められている習慣の形成や、音楽鑑賞力の形成に寄与する上質のクラシック音楽など以上に、子どものニーズにあった、みんなで、あるいはどこでも歌えるような歌を理想としていた点は、幼稚園教育独自のものであり、一部の幼稚園用の歌の本の作者の意図とも異なるものであったかもしれない。4) については、ヨーロッパの民謡やクラシック音楽、あるいはそれに近い雰囲気をもつものに Hill が音楽性を認めていたことは疑いないものであった。しかし、Hill は子どもの要求や能力という観点から、このような音楽性を求める意見に対して、一定の批判を加えていた。また、歌自体の新しさに関しても、肯定的に評価していたことが指摘できる。これは Vandewalker も部分的に指摘していたが、音楽性に関する制約としての子どもらしさ、という観点は提示されていなかった。

Vandewalker と Hill の著作の検討を通じて、幼稚園用の歌の本では、Vandewalker が指摘していたような音楽としての質の観点ばかりでなく、子どもらしさや子どもの要求という観点から歌の改善が求められていた、ことが明らかになった。とりわけ Hill は子どもに理解しやすい単純な歌の価値を、音楽的に高い水準にある歌と同じか、それ以上に評価していたようであり、ここに幼児教育としての独自性を読み取ることができる。結果として Hill の論文に登場する鑑賞 (appreciation) 概念は、芸術に関する態度というよりも、子どもが「理解」できる、という意味に近いものとなっていた。

もちろん Hill の記述にはこの時代の制約が含まれており、非常に道徳的に高い水準の潔癖さを求める傾向や、明るくユーモラスで明確なものだけを好む傾向など、明確な偏りがある。また、芸術性の観点は明確にもかかわらず、子どもらしさについては、芸術的な作品を多用すれば「子どもらしくない (unchildlike)」と表現され、単純さを求めているようであり、素朴な単純さは否定されること、また子どもっぽさとの違いは何なのかがはっきりしないことなど、不明確なところも多々あった。しかし、幼稚園における歌の受容が、上質の音楽が用いられることを一義的に求める 20 世紀初頭の音楽鑑賞教育を推進した音楽教育者側の見解とは異なるものであることや、子どもらしさ、という概念が重要であったことなどを明らかにしたことで、本論で目的とした幼稚園教育の当事者側の幼稚園用の歌の位置づけはより明確にできたと考えられる。幼稚園の歌が音楽教育という観点で評価可能であるにしろ、子どもらしさを重要な視点として規定されていたという点は、幼稚園の音楽のもつ特殊性を解明する糸口になると考えられる。

おわりに

Hill 姉妹の作った〈 Good Morning to All 〉は、〈 Happy Birthday to You 〉の旋律として現代でも知られている。Hill の考えたような子どものニーズは確かにこの歌の単純さに象徴されているようである。この歌を基準とすれば、古い時代の歌の無味乾燥さを批判した Hill 自身も批判した単調さを免れていないのではないかと考えることができそうである。しかし、ある公園で通りかかった外国籍の家族の子どもが〈 Good Morning to All 〉を口ずさんでいるのを耳にしたときに、多少なりとも Hill の主張の説得性を感じずにはいられなかった。唱歌校門を出ず、というのが日本の西洋音楽受容の実相であったとすれば、Hill の音楽は、彼女が目ざしたように子どもによって口ずさまれる曲として生き残っていた。白川 (1997) が、「フレーベルの著作は必要以上に象徴主義で粉飾されていたが、保育実践そのものは単純で乳幼児期の本質をとらえたものであった」³⁸⁾ とフレーベルの保育実践を擁護しているように、当時 Hill らが行ったような子どもらしさの探究も、さまざまな問題があるにせよ、子どもの本質に東の間遭遇したのかもしれない。

注および文献

- 1) 倉橋惣三「ピー、エス、ヒル氏「幼稚園の唱歌」」フレーベル會『婦人と子ども』第 11 巻第 2 号, 1911, p. 46.
- 2) 白川蓉子「フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の教育的意義とアメリカ、日本での受容の検討—その 1 その教育的意義とアメリカでの受容—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第 4 巻第 2 号, 1997, pp. 295-296.
『母の遊戯と育児歌』という表現は英語に忠実であるが、このような表記で紹介するものが少ないため、本論中では一般的に『母の歌と愛撫の歌』の表記を用いる。
- 3) 同前書, p. 296.
- 4) Vandewalker, N. C., *The Kindergarten in American Education*, The Macmillan Co., 1908 (Reprint: Kessinger Publishing, 2007), p. 217.
- 5) Ibid., p. 218.
- 6) Ibid.
- 7) Ibid.
- 8) Ibid., p. 50.
- 9) Ibid., p. 218
- 10) Ibid., p. 49.
- 11) Ibid., p. 174.
- 12) Ibid., p. 175.
- 13) Ibid.
- 14) Ibid., p. 176.
- 15) Hill, P. S., "The History of the Kindergarten Song in America", *Kindergarten Review*, Vol. XXI, No. 4, 1910, p. 193.
- 16) Ibid., pp. 193-194.
- 17) Ibid., p. 194.
- 18) Ibid., p. 206.
- 19) Songs and Games for Little Ones の年代については Hill が正しく、*Holiday Songs* の年代は Vandewalker が正しい。細かな記載の表記ゆれやどこまでをタイトルととるかに両者にふれがあるが、本論ではそれぞれの標記に従って記述している。
- 20) Hill, op. cit., pp. 195-197.
- 21) Ibid., p. 198.
- 22) Ibid.
- 23) Ibid., p. 199.
- 24) Ibid., p. 196.

- 25) Ibid., p. 197.
- 26) Ibid., p. 199.
- 27) Ibid., p. 205.
- 28) Ibid.
- 29) Ibid.
- 30) Ibid.
- 31) Ibid., p. 206.
- 32) Ibid., p. 202.
- 33) Ibid., p. 196.
- 34) Ibid., p. 203.
- 35) Ibid., pp. 199-200.
- 36) Ibid., p. 203.
- 37) Ibid.
- 38) 白川, 前掲書, p. 296.

Hill, P. S., "The History of the Kindergarten Song in America", *Kindergarten Review*, Vol. XXI, No. 4, 1910, pp. 193-206.

倉橋惣三「ピー、エス、ヒル氏「幼稚園の唱歌」」フレーベル會『婦人と子ども』第11巻第2号, 1911, pp. 46-47.

白川蓉子「フレーベルの『母の遊戯と育児歌』の教育的意義とアメリカ、日本での受容の検討—その1 その教育的意義とアメリカでの受容—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第4巻第2号, 1997, pp. 283-299.

武内裕明「19世紀後期の米国における幼稚園音楽教育の発展—1880年代の幼稚園用の歌の本を手がかりとして—」『音楽文化教育学 研究紀要』XXI, 2009, pp. 27-36.

武内裕明「19世紀後期の米国における幼児・児童への歌の利用に関する一考察—歌の利用への幼稚園用の歌の本のインパクトに着目して—」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』第55巻, 2010, pp. 633-638.

Vandewalker, N. C., *The Kindergarten in American Education*, The Macmillan Co., 1908 (Reprint: Kessinger Publishing, 2007).

バンデウォーカー, ニーナ C. / 中谷彪監訳『アメリカ幼稚園発達史』教育開発研究所, 1987.